

履中天皇 百舌鳥耳原南陵外堤復旧工事予定区域の事前調査

第27代履中天皇の百舌鳥耳原南陵は、本地およびい〜に号の4ヶ所の飛地からなり、本地は、周濠を備えた墳長およそ365mの巨大前方後円墳である。世界文化遺産構成資産として「履中天皇陵古墳」⁽¹⁾と呼ばれるほか、「ミサンザイ古墳」⁽²⁾、「百舌鳥陵山古墳」、「石津丘古墳」とも呼ばれる⁽³⁾。

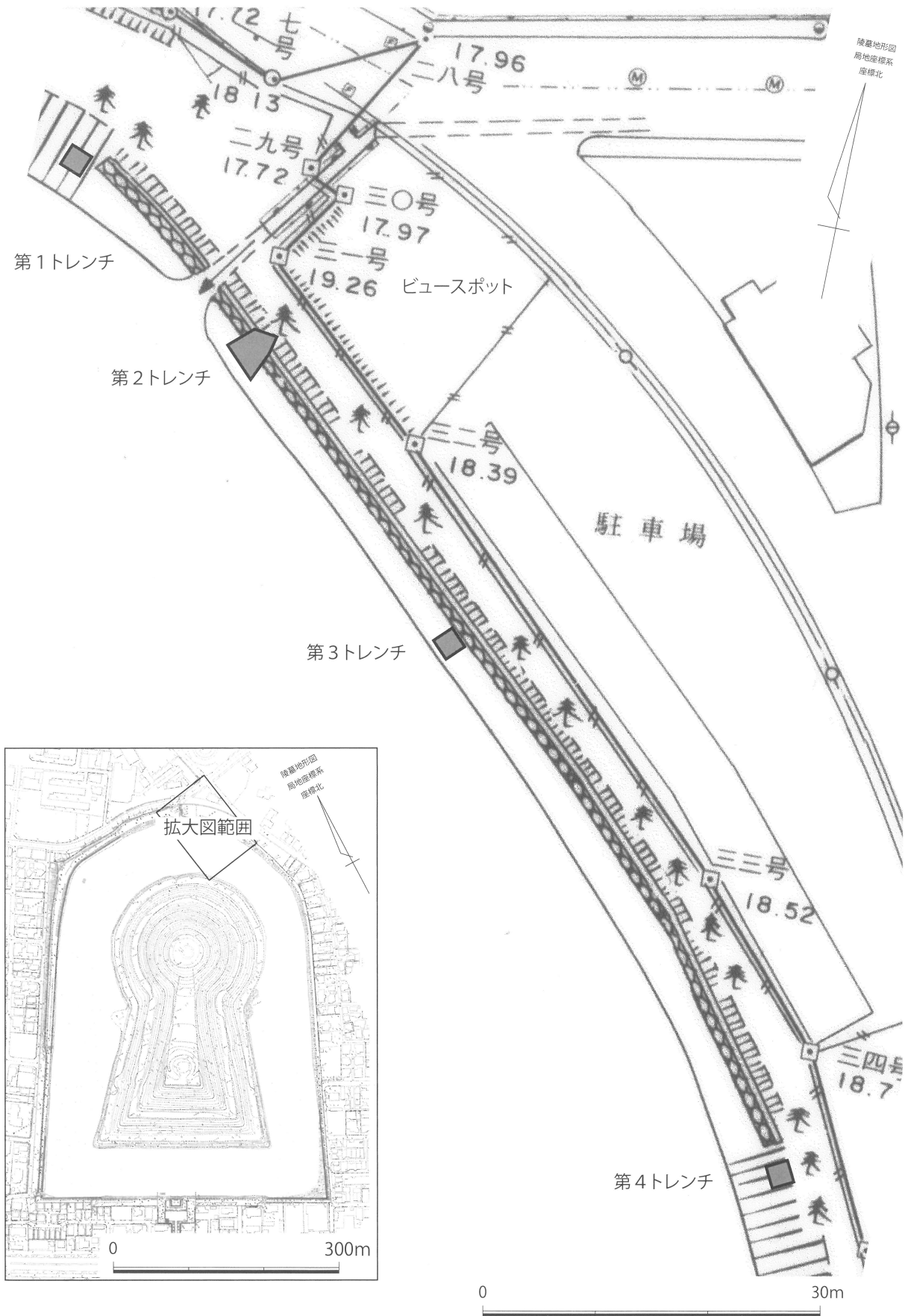
本地の周濠外堤の内法には断続的に石積護岸が設けられているが、このうち、後円部背面付近、「履中天皇陵古墳ビュースポット」近くの石積において、令和5年6月5日に「孕み」が生じていることが確認された（図版23-1）。現地を管理する古市陵墓監区事務所ではビニールシートをかけ、状況の変化に注意を払っていたが、7月31日にいたり、幅およそ3mにわたって崩落していたことが確認された（図版23-2）。8月28・29日に応急措置として崩落箇所とその左右の石積前面に土のうを積み上げる工事が実施されたが、陵墓調査室では、将来の本格的な復旧工事を見据え、遺構・遺物の状況を確認するための調査を実施することとした。調査は、令和7年3月10日〜14日に陵墓課の有馬 伸、古市陵墓監区事務所の濱田武典、森田雅也を担当として実施し、適宜、同監区事務所の小谷武史の助力を得た。なお、期間中の3月13日には、歴史学・考古学関係17学・協会の代表者への現場公開を実施した。

調査では、工事が崩落箇所だけでなく、そこを含む区間の石積全体を対象とする可能性もあることから、およそ105mある当該区間の石積の西端外側（第1トレンチ）、崩落箇所（第2トレンチ）、中間付近（第3トレンチ）、東端外側（第4トレンチ）の4箇所にトレンチを設定した（第17図）。堤体内の土層把握をめざして第2トレンチから着手したものの、すぐに上部が崩落の兆候を見せたためにそれ以上の作業を断念した（図版23-3）。続いて着手した第3トレンチでは、石積の前面において、表土（Ⅰ層）下に黄色粘質土層（Ⅲ層）、その下に地山層（Ⅳ層）を確認した（第18図1、図版23-4）。Ⅲ層は均質であったため、外堤築造当初の盛土である可能性も想定したが、断ち割ったところ、Ⅲ層下で瓦片（第19図8）が出土したことから、後世の盛土層であることが確定した。Ⅳ層は主に砂や小礫が凝固したもので、ここでの上面はおよそ標高16.5m付近である。第4トレンチでは、上方からの流土層（Ⅱ層）の下でφ5〜15cm程度の礫を一面に検出した（第18図2、図版23-5・6）（以下、「礫敷」と呼称する）。傾斜が緩くなるトレンチ下半は密度が低いが、下端付近で深めに掘ったところでは礫は検出されていない。礫敷には埴輪片や瓦片も混在していたので（第19図3・4・6・9）、後世に設置されたものである。礫敷の存在は想定外であり、その検出、精査に時間を費やしたため、現地での図化や下層の掘削はできなかった。このため、第1トレンチも未着手で終わった⁽⁴⁾。

今回の出土品は、埴輪片、土師器片、陶器片、瓦片など総数22点である（第19図、図版23-7・8）。1〜5は埴輪片である。1・2は円筒埴輪の胴部片、3は朝顔形埴輪の頸部片。4は、平らで、直線の端面とそれに並行して段差があることから、家形埴輪片と思われる。5は、直線の端面から湾曲しながら延びる破片で、湾曲の内側にあたる面に端面に並行する剥離痕がある。器形は不明。6は土師器の有段口縁の破片である。7は暗赤褐色の陶器片で、外面に強い回転ナデによる凹凸がある。8・9は瓦片。8は平瓦で、第3トレンチのⅢ層下で出土したもの。9は丸瓦の玉縁付近で、内面には細かい圧痕が残る。

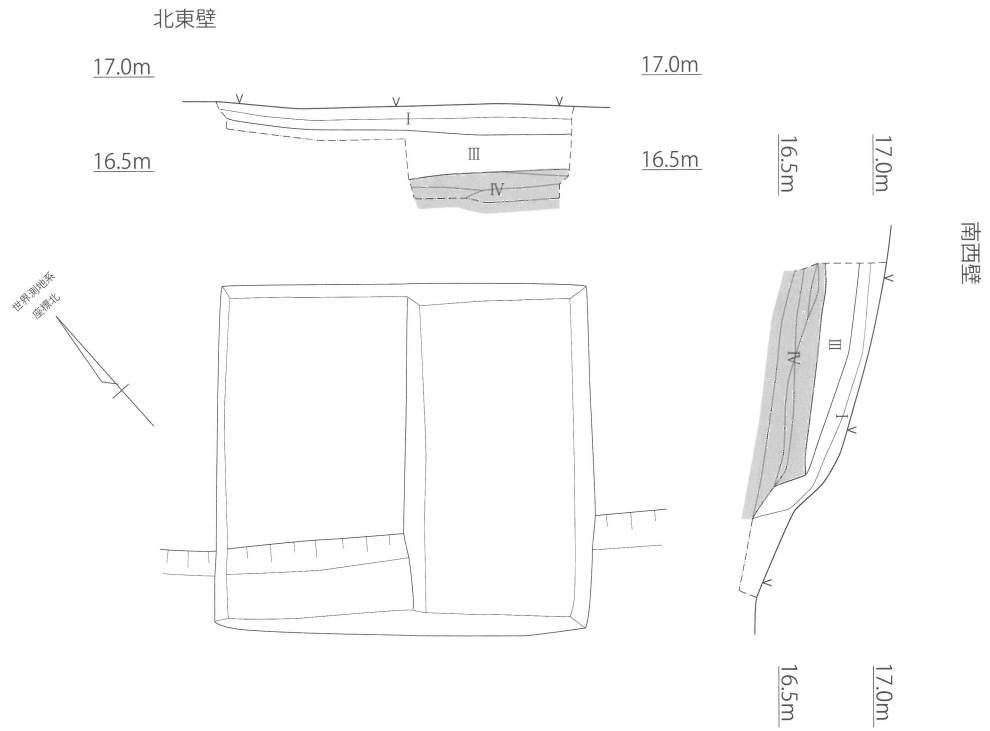
今回調査対象とした石積は、いわゆる『文久山陵図』の成功図には描かれていないが⁽⁵⁾、明治18年には今回とほぼ同じ場所が崩落している⁽⁶⁾、その間に築造されたことは確かである。明治12年の『御陵図』では、鳥瞰図には描かれているが、平面図には描かれていない⁽⁷⁾。しかし、松葉好太郎の『陵墓誌』によると、明治2年に外堤が所々崩落したので要所に石積を設け、他には「竹筵」を設けたとのことなので⁽⁸⁾、石積はその時のものである可能性が高い。そうすると、礫敷は「竹筵」と関係するものの可能性がある。

隣接するビューポイントの敷地では、標高19m付近で黄橙色粘質土の地山が確認されているとのことである⁽⁹⁾。令和3年度の当陵外堤上への基準点設置工事に伴う立会調査では、今回の調査地に近いⅡ-3で、標高18.2m付近の褐色土を主体とする土層を地山と判断している⁽¹⁰⁾。今回の調査で確認した地山とは、標高

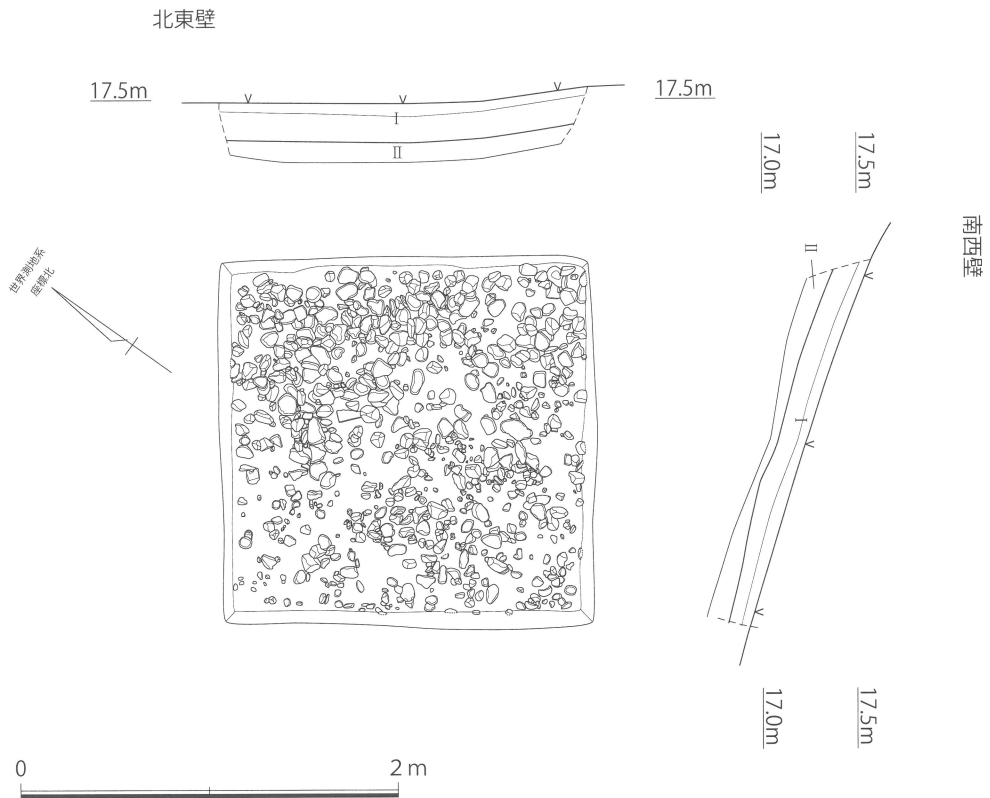


第17図 百舌鳥耳原南陵 掘削箇所位置図(1/7500・1/500)

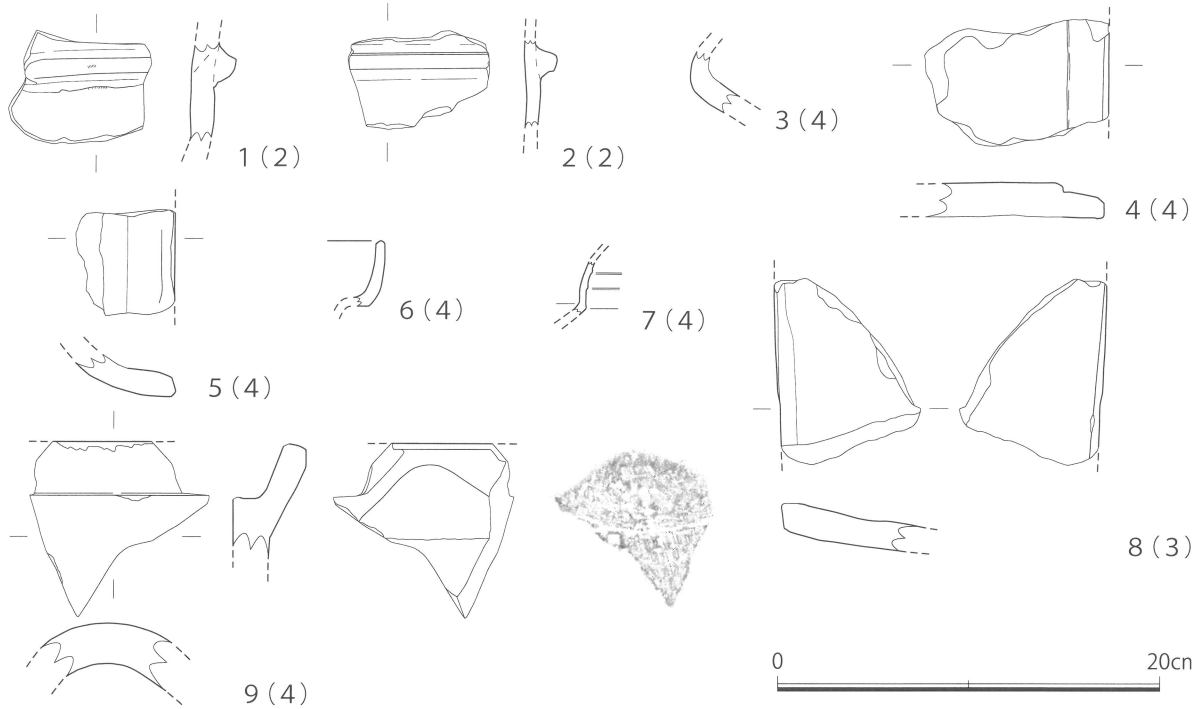
1 第3トレンチ



2 第4トレンチ



第18図 百舌鳥耳原南陵 掘削箇所平・断面図(1/40)



第19図 百舌鳥耳原南陵 出土品実測図(1/4)

も様相も大きくことなるので、その関係性については今後の課題である。

今回の調査では、当初の目的であった築造当初の遺構の存否確認については果たすことができなかった。近い将来、追加調査を実施したい。(有馬 伸)

註

- (1) 「百舌鳥エリア古墳リスト」百舌鳥・古市古墳群世界遺産保存活用会議『世界遺産 百舌鳥古市古墳群』
https://www.mozu-furuichi.jp/learn/mozu_furuichi_mozu_list.html
- (2) 堺市役所『堺市 e-地図帳』<https://e-map.city.sakai.lg.jp/sakai/Portal>
- (3) 仮屋喜一郎「百舌鳥陵山古墳(石津丘古墳・伝履中天皇陵古墳)」近藤義郎編『前方後円墳集成』近畿編、山川出版社、1992年。
- (4) 第18図2に掲出している第4トレンチの平面図は、現地にて撮影したデジタル写真からMetashape Standard (Agisoft社)によりSfM/MVSの手法を用いて作成したオルソ画像をトレースしたものである。このオルソ画像作成では、陵墓調査室・的場匠平氏の手を煩わせた。感謝の意を表す。
- (5) 鶴澤探眞「履中帝 百舌鳥耳原中陵 成功」(外池昇編『文久山陵図』、新人物往来社、2005年)。
- (6) 「第一七號 履中天皇御陵陵民費修繕願聞届ノ件」諸陵寮出張所(宮内省支廳)『陵墓地録2 明治18年』(宮内公文書館所蔵、識別番号:2526-2)。
- (7) 『陵墓資料(図帖類)御陵図』(宮内公文書館所蔵、識別番号:42087。『書陵部所蔵資料目録・画像公開システム』(<https://shoryubu.kunaicho.go.jp>)において閲覧可能)。
- (8) 松葉好太郎『陵墓誌 古市部見廻区域内』、私家版、1925年(図書寮文庫所蔵、函架番号:A1・1778)。
- (9) 堺市文化観光局文化部文化財課 富島健司氏ご教示。なお、同氏によれば、ビューポイント敷地内で水路跡を検出しており、今回の崩落箇所がその延長線上にあたるため、それが崩落の原因ではないかとのご指摘もいただいた。諸々のご教示に感謝の意を表す。
- (10) 加藤一郎・土屋隆史「令和2年度 履中天皇 百舌鳥耳原南陵倒木復旧に伴う調査」『書陵部紀要』第74号〔陵墓篇〕、宮内庁書陵部、2023年。

〔付記〕 当報告作成にあたり諸資料を再検討したところ、石積や石敷の施工時期について、以前の理解およびそれに基づく説明に誤りがあったことが判明した。当報告を最終的なものとしていただきたい。



1 石積 孕み状況 (南東から)



2 石積 崩落状況 (北西から)



3 第2トレンチ 作業停止時 (南西から)



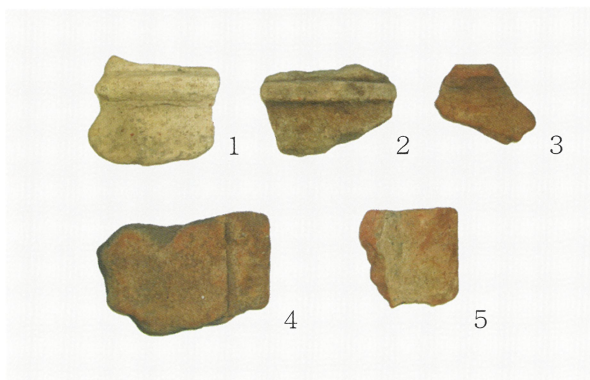
4 第3トレンチ 全景 (西から)



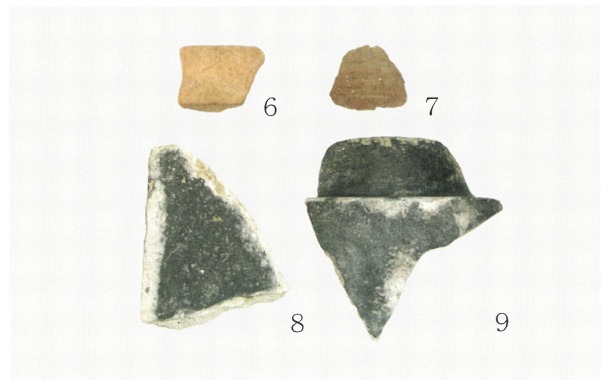
5 第4トレンチ 全景 (西から)



6 第4トレンチ 石敷 (南西から)



7 出土品 埴輪



8 出土品 土師器・陶器・瓦